

日本語母語話者と日本語学習者の接触談話における「ほめ」 —中国語を母語とする上級日本語学習者を対象として—

永 田 良 太

1. はじめに

「ほめ」は他者から認められたいという相手のポジティブ・フェイスを満たす発話行為であり（古川 2007）、人間関係を構築する上で重要な役割を果たす。日本語の「ほめ」に関しては、表現レベルでの分析に加え、近年では発話の連鎖という観点や談話レベルでの分析も見られ、その特徴が明らかになりつつある。ただし、それらの研究の多くは日本語母語話者を対象としたものであり、日本語学習者の「ほめ」に関しては明らかにされていない部分が多い。特に、日本語学習者を対象とした談話レベルの「ほめ」の分析はこれまで行われておらず、日本語学習者が会話中でどのように「ほめ」を運用しているかについては未だ明らかにされていない。そこで、本研究においては、日本語学習者の「ほめ」を談話レベルで捉え、先行研究で明らかにされている日本語母語話者の特徴と比較しつつ、その実態を明らかにするとともに、今後の日本語教育に向けて留意すべき点を探りたい。

2. 先行研究

日本語の「ほめ」に関しては、「ほめ」の対象や「ほめ」に用いられる表現についてこれまで明らかにされている。「ほめ」の対象に関して、古川（2000）では「ほめ」が会話の場に存在する参加者のみでなく、共通の知人や有名人などといったその場に存在しない第三者にも向けられることが指摘されている。また、「ほめ」に用いられる表現に関しては、評価語、感情表現、羨望表現などが指摘されている（大野 2003）。そのような表現レベルでの指摘に加え、研究対象が拡大されるにつれて、「ほめ」に至るまでの展開（熊取谷 1989）や「ほめ」に対する応答（寺尾 1996、平田 1999、大野 2004 など）についても明らかにされている。日本語学習者の「ほめ」に関しても、表現レベルで分析が行われ、同一の対象に対して「ほめ」が行われる場合、日本語学習者は日本語母語話者よりも多様な表現を用いることが指摘されている（大野 2009）。

このように、日本語の「ほめ」に関しては、主に表現レベルや発話の連鎖に着目して分析が行われ、その特徴が明らかにされているが、談話レベルで会話の参加者相互のフェイス・

バランスの維持に関わる役割を果たすことも指摘されている。永田（2014）では、日本語母語話者同士の会話を分析することで、談話レベルにおける「ほめ」の特徴について、以下の3点が指摘されている。

- ①参加者に関わるトピック内ではどちらか一方の参加者によって「ほめ」が行われることが多いのに対して、参加者に関わらないトピック内では双方の参加者による「ほめ合い」が行われることが多い。
- ②先行トピックでどちらか一方の参加者によって「ほめ」が行われた場合には後続トピックで他方の参加者が「ほめ」を行うという「ほめの交替」が見られる。
- ③「ほめの交替」が見られる場合、先行トピックで単独の「ほめ」が見られた場合には後続トピックにおいても単独の「ほめ」が見られることが多い。一方、先行トピックで複数の「ほめ」が見られた場合には、後続トピックにおいても複数の「ほめ」が見られることが多い。

（永田 2014、pp.37-38）

上記の①は、第三者に関するトピック中で、双方が第三者に対する「ほめ」を行うことで、互いの価値観を承認し合うという相互行為が見られるということである。②と③は、参加者自身に関わるトピック中で、片方の参加者から「ほめ」が行われた場合には、後続するトピックにおいてほめられた側が相手をほめ返すという行為が見られる。そしてその際、単独の「ほめ」に対しては単独の「ほめ」、複数の「ほめ」に対しては複数の「ほめ」が返されるということである。先に述べたように、「ほめ」は相手のポジティブ・フェイスを満たす発話行為であるが、談話レベルで見ると、そのような「ほめ」が相互に行われることで、一方のポジティブ・フェイスのみが満たされるということではなく、お互いのフェイスのバランスが保たれていると言える。

このように、日本語母語話者は「ほめ」を用いて人間関係を構築するための働きかけを行っているが、日本語学習者は会話中で「ほめ」をどのように運用しているのだろうか。先に述べたように、日本語学習者の「ほめ」に関しては表現レベルで分析が行われているものの、その運用の実態については明らかにされていない。そこで、本研究では、上記のような日本語母語話者の特徴と比較しつつ、その実態を明らかにする。

3. 分析と考察

3. 1 分析資料

本研究で分析資料として用いるのは日本語母語話者と日本語学習者による接触場面の8組の自由談話である。会話のトピックは事前には指定されず、開始から15分～20分程度経過したら会話を終了させて退室するように指示された。会話はICレコーダーに録音された。本研究ではそれを文字化したものを分析資料とする。

会話の参加者である日本語学習者8名はいずれも大学院生の中国語母語話者であり、日本語能力試験N1取得者である。日本での滞在歴は全員2年以上である。対話者である日本語母語話者との関係について、永田（2014）と比較するために、類似する属性を持つ大学院生もしくは研究員との初対面会話とした。

3. 2 「ほめ」の出現数

本談話資料中に見られた「ほめ」の出現数を談話別にまとめたものが表1である。なお、各談話に見られた「ほめ」の出現総数に占める日本語母語話者と日本語学習者の「ほめ」の割合を（ ）内に示す。

表1 「ほめ」の出現数

	談話 1	談話 2	談話 3	談話 4	談話 5	談話 6	談話 7	談話 8
日 本 語 母語話者	12 (85.7%)	0 (0%)	14 (77.8%)	3 (60%)	2 (66.7%)	1 (100%)	8 (100%)	3 (42.9%)
日 本 語 学 習 者	2 (14.3%)	0 (0%)	4 (22.2%)	2 (40%)	1 (33.3%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (57.1%)
合 計	14 (100%)	0 (0%)	18 (100%)	5 (100%)	3 (100%)	1 (100%)	8 (100%)	7 (100%)

先に述べたように、日本語母語話者同士の会話において「ほめ」は両者のフェイス・バランスの維持に関わる働きをするが、「ほめ」の出現数も会話者相互間でほぼ均等であることが指摘されている（永田 2014）。一方、日本語母語話者と日本語学習者との接触場面の会話では「ほめ」の不均衡が見られることが表1から分かる。例えば、談話7においては、日本語母語話者からの「ほめ」によって会話相手である日本語学習者のポジティブ・フェイスが満たされているにもかかわらず、日本語母語話者のポジティブ・フェイスを満たすような「ほめ」は日本語学習者から行われておらず、両者のフェイス・バランスに不均衡な状態が生じていると考えられる。

では、談話中に見られる「ほめ」の現れ方も日本語母語話者同士の会話とは異なるのであ

ろうか。以下においては、トピック展開との関わりから分析を行い、永田（2014）と比較しつつ、その特徴を明らかにする。

3. 3 談話のトピック展開における「ほめ」

3. 3. 1 接触談話のトピック構造における「ほめ」の出現位置

村上・熊取谷（1995）によれば、談話におけるトピックは構造をなしており、トピックとトピックとの切れ目には様々な言語的表示が見られるという。トピックの開始部には「そう言えば」、「あ」といった認識の変化を示すことばや「月曜日ね」、「○○さんて」などのトピックのフレームの提示（村上・熊取谷 1995）、「えっ」のように相互行為を指標する表現や終助詞を伴う評価表現（中井 2004）が見られることが指摘されている。一方、トピックの終結部には、まとめや評価をする表現やそれらを導く「まあ」、「じゃあ」などの談話標識（村上・熊取谷 1995）、あいづちや発話の断片（中井 2004）が見られるという。

また、杉戸・沢木（1979）によれば、一つのトピックを構成する語彙には意味的連関性が認められるという。本研究では、そのような語彙の意味的関係や先に述べたトピックの切れ目に見られる言語的表示を手掛かりとしてトピックの認定を行った。なお、トピックの認定に際しては、筆者以外の認定者 2 名^(注1) にトピックの認定を依頼し、不一致の箇所に関しては認定者間で協議を行った。本研究では、筆者を含めた認定者 3 名中、2 名の判断が一致したものを一つのトピックとして扱う。

分析対象について、表 1 に示されるように、本談話資料においては「ほめ」が見られなかった談話（談話 2）と「ほめ」が 1 例しか見られなかった談話（談話 6）が観察された。本研究では、「ほめ」を相互作用の視点から分析するため、以下においては、これら二つの談話を除く六つの談話を対象として分析を行う。なお、それぞれの談話には、具体的なトピックが展開される前にあいさつや自己紹介等が行われる「会話の開始部」と、具体的なトピックが展開された後で、会話の終結に向けてのいとまごいやあいさつ等が行われる「会話の終結部」が存在する。これらは具体的なトピックが展開される部分とは性格を異にするため、本研究では分析の対象から除外する。

分析対象とする六つの談話について、各トピックにおける「ほめ」の現れ方を談話別にまとめたものが以下の表 2-1～表 2-6 である。表中の丸数字は、それぞれの談話で見られた「ほめ」を発話者別に時系列に表したものである。なお、本談話資料中に見られたトピックは、後述するように「参加者に関わるトピック」と「参加者に関わらないトピック」に大別されるが、以後の分析のために、「参加者に関わるトピック」にはトピック番号に網掛けを施してある。また、表中の「J」は日本語母語話者を「C」は日本語学習者をそれぞれ表す。

表 2-1 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話 1＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
J		②	③④	⑤	⑥	⑦⑧	⑨		⑪⑫⑬⑭	12 (85.7%)
C	①							⑩		2 (14.3%)

表 2-2 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話 3＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
J	①			⑤⑥⑦⑧	⑨		⑩⑪⑫⑬	⑭	⑮⑯⑰		14 (77.8%)
C			②③④							⑱	4 (22.2%)

表 2-3 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話 4＞

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
J				①		②③					3 (60%)
C									④⑤		2 (40%)

表 2-4 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話 5＞

	1	2	3	4	5	合計
J		②	③			2 (66.7%)
C	①					1 (33.3%)

表 2-5 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話 7＞

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
J	①				②③④	⑤	⑥⑦		⑧	8 (100%)
C										0 (0%)

表 2-6 トピック展開時に見られた「ほめ」＜談話 8＞

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計
J						①					②③					3 (42.9%)
C												④⑤⑥			⑦	4 (57.1%)

トピックの性質に着目して表 2-1～表 2-6 を見ると、日本語母語話者と日本語学習者による初対面会話では「参加者に関わるトピック」（網掛け部）が採用されることが多いことが分かる。永田（2014）で分析された日本語母語話者同士の初対面会話では 9 組すべての談話において、有名人などの「参加者に関わらないトピック」が見られるが、本談話資料においてそのような「参加者に関わらないトピック」が見られたのは 8 組中、2 組（談話 1、談話 4）のみである。

このように、採用されるトピックの種類に関して、日本語母語話者同士の初対面会話と日本語母語話者と日本語学習者による初対面会話とでは違いが見られるが、それぞれのトピックにおける「ほめ」の現れ方にも違いが見られるのであろうか。以下においては、日本語母語話者

と日本語学習者との接触談話における「ほめ」について、トピックの性質別に分析を行う。

3. 3. 2 「参加者に関わるトピック」における「ほめ」の現れ方

日本語母語話者同士の初対面会話を分析した永田（2014）では、「参加者に関わるトピック」において、片方の参加者から「ほめ」が行われた場合には、直後のトピックにおいて、ほめられた側が相手をほめ返すという「ほめの交替」が見られることが指摘されている。以下に永田（2014）の例を挙げる^{（注2）}。

例(1)

- 1 R：あの、高校があ、英、英語をたくさんするようなクラスだったんですよ [え]
毎日
- 2 Q：いいなあ
- 3 R：で、あの、カナダに行けるんですよ、そこの学、学科に [あー] 入れば、一週、えっ
と、一ヶ月、カナダでホームステイをして
- 4 Q：すごいじゃないですか
- 5 R：ていう高校で
＜中略＞
- 6 R：行ったことあるんですか？あのイギリスでしたっけ？ありますよね
- 7 Q：あー
- 8 R：留学するやつ、行ってなかったんです？
- 9 Q：あの、私、今度行くんですよ
- 10 R：あ、そうなん、どこに行くんですか？
- 11 Q：今度、ニュージーランド行くんですよ
- 12 R：あ、もしかして
- 13 Q：はい、なんか聞いたことがあります？
- 14 R：えーと、どこだっけ、P（大学名）
- 15 Q：あ、はい、そうです
- 16 R：Y（著名な研究者）がいるところ
- 17 Q：あ、そうですそうです
- 18 R：なんか聞いたことがある、いいなあ、Yがいるんだ
- 19 Q：いやー
- 20 R：うらやましい

（永田 2014、p.36）

例(1)では、「Rの出身高校における留学プログラム」に対して「いいなあ」というパラ言語を伴った羨望表明による「ほめ」(発話番号2)および「すごい」という評価語による「ほめ」(発話番号4)がQによって行われている。そのようなトピックが展開された後、発話番号6のRの発話によって、「Qの留学」についてのトピックに移行しているが、そこでは「いいなあ」や「うらやましい」といった羨望表明による「ほめ」(発話番号18,20)がRによって行われている。このように、ほめられた側が、相手に関して「ほめ」の対象となりうるトピックを自ら導入し、そのトピック内でほめ返すという「ほめ」の相互行為が成立していると永田(2014)は指摘する。永田(2014)で分析された9組の日本語母語話者同士の会話において、「ほめ」が観察された「参加者に関わるトピック」は38例であるが、直後に「(他方の)参加者に関わるトピック」が導入され「ほめ」が行われていたものが19例(50%)観察されている。

このような観点で先の表2-1～表2-6を見ると、「ほめ」が見られた「参加者に関わるトピック」は27例であるが、表2-1のトピック1とトピック2のように、その直後に「(他方の)参加者に関わるトピック」が導入され「ほめ」が行われていたものは5例(18.5%)のみである。その内訳を見ると、日本語母語話者は日本語学習者からの7例の「ほめ」に対して3例(42.9%)の「ほめ」を自ら導入した直後のトピックで行っていたのに対して日本語学習者は日本語母語話者からの20例の「ほめ」に対して2例(10%)の「ほめ」を自ら導入した直後のトピックで行っていた。ここから、特に日本語学習者においては、ほめられた側が直後のトピックで相手をほめ返すという「ほめの交替」を談話中で成立させるような働きかけが少ないことが分かる。

また、「ほめの交替」が行われる際の「ほめ」の回数に関して、永田(2014)では単独の「ほめ」に対しては単独の「ほめ」が、複数の「ほめ」に対しては複数の「ほめ」が直後のトピックで行われることが指摘されている。表2-1～表2-6を見ると、日本語母語話者においては同様の傾向が認められる。例えば、表2-1(談話1)のトピック1とトピック2においては日本語学習者から単独の「ほめ」が行われた直後のトピックで自らも単独の「ほめ」を行っている。また、表2-2(談話3)のトピック3とトピック4では、日本語学習者から複数の「ほめ」が行われた直後のトピックで自らも複数の「ほめ」を行っている。

一方、日本語学習者においては、表2-6(談話8)のトピック11とトピック12のように、日本語母語話者からの複数の「ほめ」に対して複数の「ほめ」が行われているものもある一方で、日本語母語話者からの複数の「ほめ」に対して単独の「ほめ」が返されているものも見られる(談話3:トピック9とトピック10)。日本語学習者に関する用例数が少ないため、この点について、本研究において明確に述べることは難しいが、日本語母語話者と日本語学習者の接触場面の談話におけるこのような「ほめ」の量的なバランスの問題についても、さ

らに分析が行われ、考察が深められる必要があるであろう。

3. 3. 3 「参加者に関わらないトピック」における「ほめ」の現れ方

先に述べたように、日本語母語話者同士の談話に比べて、日本語母語者と日本語学習者の接触場面の会話では「参加者に関わらないトピック」が採用されることが少ないが、ここではそのようなトピックが採用された場合の「ほめ」の現れ方について分析する。

表2-1と表2-3に示されるように、談話1と談話4においては「参加者に関わらないトピック」が見られる。そこでは有名人や有名な場所など、会話の参加者に直接関わらない対象がトピックとして採用され、会話が展開されている。永田（2014）では、日本語母語話者同士の会話で採用されるそのような「参加者に関わらないトピック」において、当該の対象について会話の参加者が相互にほめる「ほめ合い」が見られることが指摘されている。以下に永田（2014）の例を挙げる。

例(2)

- 1 M：従業員なんかよく、搬入で入ってくるトラック [うんうん] の、その、スペースがあって
- 2 N：うんうん
- 3 M：そこに野球のシーズンになったらネットはって、その、その選手が、こう [あー] 素振りとか出来るようにしてるから
- 4 N：へー
- 5 M：だから（球団名）とかが来たときは、X（選手名）はいつも素振りしてた
- 6 N：やっぱX偉いなー
- 7 M：Xは偉いよ
- 8 N：やっぱその辺が偉いなー
- 9 M：偉いよね、やっぱ実力ある人はこういうところでも練習するんよね、その、だいたいバイトが4時間ぐらいで、その会場に行く時に通った時も素振りしてた
- 10 N：うん
- 11 M：で、ま、下りてきてもまだ素振りしてたからね
- 12 N：すげーなー、X

（永田 2014、p.35）

例(2)では、第三者である「X 選手の行動」に対して N が「偉い」という評価語を用いて「ほめ」を行っているが（発話番号 6）、それを受けた M も同様に「偉い」という評価語を

用いて X 選手に対する「ほめ」を行っている（発話番号 7）。その後も同様の評価語（「偉い」）を用いた「ほめ」（発話番号 8、9）や「すごい」という評価語がパラ言語によって強調された「ほめ」（発話番号 12）が続いており、「X 選手の行動」という同じ対象に対して、参加者双方が「ほめ」を行うという「ほめ合い」が見られる。永田（2014）によれば、このような「ほめ合い」を通して、参加者相互の価値観が承認されるとともに両者が共通の価値観を持つことが確認されているという。

一方、表 2-1 と表 2-3 に示されるように、日本語母語話者と日本語学習者の接触場面の談話に見られる「参加者に関わらないトピック」においては、いずれの場合にも、そのような「ほめ合い」は見られない。以下に例を示す。

例(3)

- 1 C : めっちゃ人多かったですね
- 2 J : あー、そうですね [はい] あそこは、かなり多いですねー。えー、そう、あそこの近くにある水族館も好き
- 3 C :
- 4 J : あ、ほんとですか
- 5 C : (人が) 多かったです
- 6 J : 《かわいい》イルカたちが
- 7 C : うん
- 8 C : うん
- 9 J : へー
- 10 C : 東は東京に行ったんですけど [うんうん]、ま、東京に何回も、何回か、も、行ったんですけど、こう、もう全然、1 回も泊まったことがないんですよ

例(3)では、会話の参加者がともに訪れたことがある「水族館」についてのトピックが展開されているが、「水族館」やその付随物である「イルカ」に対して、日本語母語話者によって「好き」や「かわいい」といった評価語が用いられ、「ほめ」が行われている（発話番号 2、6）。一方、そのような「ほめ」に対して日本語学習者は「(人が) 多かったです」（発話番号 5）や「うん」（発話番号 7）という発話を行っており、日本語母語話者同士の談話で見られるような「ほめ合い」は成立していない。

また、日本語学習者による「うん」という発話（発話番号 7）の後、2 秒の沈黙が生じ、「うん」、「へー」という発話の交換（発話番号 8、9）を経て「東京旅行」という別のトピック

へと移行している。このような「沈黙」やその後のトピックの転換にも「ほめ合い」の不成立が影響していると考えられる。すなわち、日本語母語話者が期待する「ほめ」が日本語学習者から得られなかったために、会話がとん挫し、当該のトピックが発展させられることなく別のトピックへと移行したと考えられる。

表2-1と表2-3に見られる5つの「参加者に関わらないトピック」のうち、4つのトピックにおいて日本語母語話者からの「ほめ」が見られるが、そのような「ほめ」に対して日本語学習者から「ほめ合い」を実現させるような働きかけ（「ほめ」）は行われていない。表2-1（談話1）のトピック8においては、日本語学習者からの「ほめ」に対して日本語母語話者も「ほめ合い」を実現させていないが、永田（2014）で指摘されるように、談話における「ほめ」がその後の「ほめ」に影響することをふまえると、それ以前に「ほめ合い」が実現されていないことが影響している可能性も考えられる。

このような「ほめ合い」の不成立は、談話展開への影響に加えて、人間関係の構築にも影響すると考えられる。談話における「ほめ合い」を通してお互いの価値観が承認されるとともに共通の価値観を持つことが確認されることをふまえると、「ほめ合い」の不成立は会話者間にフェイス・バランスが不均衡な状態を生じさせると考えられる。

以上、見てきたように、日本語母語話者と日本語学習者の接触場面の談話においては「参加者に関わらないトピック」が採用されることが少なく、採用されてもその中でお互いのフェイスを満たすような「ほめ合い」は行われていない。すなわち、「参加者に関わらないトピック」が「ほめ」を用いた密接な人間関係を構築する場として活用されていないと言える。

4. まとめと日本語教育への提言

本研究では日本語母語話者と中国語を母語とする上級日本語学習者の接触場面の談話における「ほめ」について分析を行った。先行研究で明らかにされている日本語母語話者同士の談話に見られる「ほめ」と比較することで、中国語を母語とする上級日本語学習者には以下のような特徴が見られることが明らかになった。

- I. 「参加者に関わるトピック」において、日本語母語話者からの「ほめ」に対して直後のトピックで「ほめ」を行い「ほめの交替」を実現させるという働きかけが中国語を母語とする上級日本語学習者には少ない。
- II. 「参加者に関わらないトピック」において、会話の場に存在しない第三者を相互にほめるという「ほめの交替」を実現させるような働きかけが中国語を母語とする上級日本語学習者には見られない。

本研究で明らかにした上記のような「ほめ」の特徴は、談話展開に影響するとともに、両者のフェイス・バランスが不均衡な状態を生じさせ、円滑な人間関係の構築に影響を及ぼす可能性がある。

ここで、「ほめ」が関わるフェイス・バランスに関しては、隣接ペアによって保たれるものも見られる。例えば、本談話資料においては「日本語もしゃべれるしね」という日本語母語話者からの「ほめ」に対して「いやいや、まだまだ」という学習者の発話が見られた。このような隣接ペアが構成されることで、自らのポジティブ・フェイスが一方的に満たされることが軽減されていると言える。本談話資料にはこのような応答が2名の学習者に1例ずつ見られた（談話3、談話7）。これらの学習者においては隣接ペアを用いてフェイス・バランスを維持しようとする意図が見受けられるが、人間関係の構築に重要な役割を果たすフェイス・バランスの実現に向けて、今後は本研究で着目したような談話レベルにも目を向け、指導を行っていく必要があるであろう。

注

- (1) 筆者以外の認定者2名は43歳女性と38歳男性であり、いずれも日本語母語話者である。
- (2) 会話例の表記に関して、発話中に打たれたあいづちを〔 〕、発話の重なりを〔、笑いを伴う音声を《 》、疑問を表す上昇調のイントネーションを？でそれぞれ表す。また、意味を補足した部分を（ ）で表す。

謝辞

本研究は2013年度JSPS科研費25284096（基盤研究(B)『アーティキュレーションを保証する言語能力アセスメント実施支援システムの構築』研究代表者：渡部倫子）の助成を受けたものである。

<参考文献>

- 大野敬代（2003）「人間関係からみた「ほめ」とその工夫について－シナリオにおける「働きかけ表現」として－」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』（10）- 2、pp.337-346、早稲田大学大学院教育学研究科。
- 大野敬代（2004）「待遇からみた「ほめ」の応答とその工夫－シナリオ談話における politeness ストラテジーとしての分析から」『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』（52）、pp.27-39、早稲田大学教育会。

- 大野敬代 (2009)「日本語母語話者と学習者の目上への「ほめ」のあり方－アンケート調査の結果からみえる両者の配慮－」『早稲田日本語研究』(18)、pp.60-71、早稲田大学日本語学会.
- 熊取谷哲夫 (1989)「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』(2)、pp.97-108、広島大学教育学部日本語教育学科.
- 杉戸清樹・沢木幹栄 (1979)「言語行動の記述－買い物行動における話しことばの諸側面－」『言語と行動』南不二男 (編)、pp.271-319、大修館書店.
- 寺尾留美 (1996)「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』15(5)、pp.81-88、明治書院.
- 中井陽子 (2004)「話題開始部／終了部で用いられる言語的要素－母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合－」『講座日本語教育』40、pp.3-26、早稲田大学語学教育研究所
- 永田良太 (2014)「談話のトピック展開から見た「ほめ」」『表現研究』(99)、pp.30-39、表現学会
- 平田真美 (1999)「ほめ言葉への返答」『横浜国立大学留学生センター紀要』6、pp.38-47、横浜国立大学.
- 古川由里子 (2000)「「ほめ」の条件に関する一考察」『日本語・日本文化研究』10、pp.117-130、大阪外国語大学日本語講座.
- 古川由理子 (2007)「「ほめ」の返答とポジティブ・フェイス－日本語教育への応用を目指して－」『間谷論集』(1)、pp.99-114、日本語日本文化教育研究会.
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995)「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』(62)、pp.101-111、表現学会.

(ながた りょうた・広島大学)